

# A-77 社会人の味覚に就いて

生活学園短大 熊谷則子 和洋女子大 文家政 小関恵子 寺山千枝子  
早大教育体育生理 田原美樹 伊藤秀三郎

## 目的

味覚には単純なもの、複雑なものそして特殊なものがあるが、社会人の味覚特に単純味覚はどうであろうか、検討したのがこの調査実験の目的である。

## 方法

《被験者》那覇市ではXX組の女子職員(19~56才)、東京都では〇〇組の職員(男18~70才、女18~62才)である。《期日》XX組は昭和48年2月23日、〇〇組は昭和48年5月17日である。

《手技》調査実験内容を開始前被験者に説明し、疲労しない早さで味質の低い濃度の液から高い濃度のものにと、舌上より滴下(約1.5cc)を行ない、被験者に味覚の様相をえわせ、その後必ず嗽をさせた。

味質たる甘鹹酸苦には、一番多く調理で使われる砂糖、食塩、酢と塩酸キネチを用い、その濃度は次記の如き五段階である。砂糖(0.2, 0.4, 0.6, 0.8, 1.0%) 食塩(0.02, 0.04, 0.06, 0.08, 0.1%) ミツカン酢(0.2, 0.4, 0.6, 0.8, 1.0%) 塩酸キネチ(0.0002, 0.0004, 0.0006, 0.0008, 0.001%)

## 結果

- (1) XX組と〇〇組との女子職員の味覚感値と比較すると、前者の方が高い。
- (2) 〇〇組職員の味覚に因る性差は、鹹と苦とにある。